

イドウトのmastaba墓を修復するために

著者	吹田 浩
雑誌名	阡陵：関西大学博物館彙報
巻	48
ページ	5-6
発行年	2004-03-31
URL	http://hdl.handle.net/10112/00024018

イドウトのmastaba墓を修復するために

吹田 浩

エジプトのmastaba墓を修復するために調査することになった。エジプトの文化財の保存修復活動に関与するのは、私が1998年の秋から半年のあいだカイロ大学考古学部の保存修復学科に客員研究員として滞在して以来の念願であった。

今回の調査は、私のほかに西浦忠輝先生（東京文化財研究所）、本学の米田文孝先生（考古学）、さらにアフメド・シュエイブ先生（壁画保存）、アーデル・アカリシュ先生（化学分析）という日本とエジプトの合同チームによる研究である。

調査隊には、「日本・エジプト合同mastaba・イドウト調査ミッション」という名をつけた。これは、日本が遺物を修復して終わるのではなく、エジプトと日本の専門家が長期にわたって交流をおこない、技術を共有すべきであるという思いからである。このような姿勢もあって、我がミッションは、エジプト側から「この種の活動のモデル・ケースである」と評価されている。

さて、調査の対象はイドウトという名前を持つ女性のmastaba墓である。この女性は、古王国第五王朝最後の王ウニスの娘である。紀元前2360年ごろのことであるから、四千年以上も昔の人物とお墓を扱うことになる。

mastabaというのは、「ベンチ」を意味するアラビア語である。ベンチといっても、背もたれのない、ただ腰をかけるだけのものであり、お墓の形がこれに似ているためにmastaba墓と呼ばれているのである。ピラミッドが王のための墓

であったのに対して、貴族などはこのようなmastaba型のものをみずからのお墓としたのである。

彼女が生きた第五王朝というのは、一つ前の第四王朝があまりに偉大な時代であったために影が薄く、あまり知られていない。第四王朝は、クフ王、カフラー王、メンカウラー王がギザに三大ピラミッドを造営した王朝で、世界の誰しものが知っているであろう。実際に、クフ王のピラミッドは150mほどの高さがあり、見る者を驚嘆させる。これに対して、イドウトの父、ウニス王のピラミッドは、わずか40mの高さしかなく、現在では崩れて、とてもピラミッドのように見えない状態になってしまっている。



石棺の蓋の上で、断片を整理する米田教授



床を清掃中の濱君



イドウトのmastabaとジョゼル王の階段ピラミッド

彼女のmastaba墓も、本来はイヒという人物のために作られたものである。彼の墓を暴力的に略奪したのか、あるいは、合意の上で譲り受けたのか、正確な経緯はわからない。また、彼女が早世してやむを得ない処置であった可能性もある。彼女の生涯は、彼女の墓の碑文からもほとんど情報をえることができない。いずれにせよ、王の娘に周到に準備されたお墓が用意できていないのである。彼女が生きたのは、かつての偉大で栄光に満ちた時代に比較して国力に陰りがでてきた時代であったろう。

それでも、このイドゥートと父ウニスの時代は偉大であった。ウニスのピラミッドは見てくれの悪さにもかかわらず、その内部には、大変に美しいピラミッド・テキストが残されている。これは最古のまとまった宗教文書であり、壁に丁寧に彫り込まれ、彩色されている。制作が丁寧であるのが古王国時代の特色であり、ウニス王の時代のあらゆる記念碑にあてはまる。彼のピラミッドの参道にそって、家臣たちのmastabaが整然と整備されており、それらは実に美しいレリーフで飾られている。新王国のラムセス2世の時代が帝国時代として物的豊かさを享受していたにもかかわらず、記念碑のつくりが雑であったとは対照的である。

イドゥートのmastabaは、1927年に発見され、1935年にエジプト人の調査が行われ、立派な報告書が出されている。現在では、修復も十分に行われ、当時の姿を思い起こさせてくれる。

彼女のmastaba墓の背後に見えているのは、第三王朝ジョゼル王のピラミッドである。このピラミッドは、エジプトでも初めてのピラミッドであり、六段の階段状の形をしており、階段ピラミッドと呼ばれている。高さは、60mほどある。イドゥートの墓は、このジョゼル王のピラミッドの周壁の南に位置している。

今回の調査の地は、現在、サッカラと呼ばれている地域であるが、古代エジプト時代の墓域であった。古王国時代のものが中心となるとはいえ、初期王朝時代から末期時代まで、これほど多くの墓がバラエティーに富みながら密集している地域は他にはない。テーベ（現在のルクソール）の王家の谷でさえ、新王国時代のものにかざられるのである。

このイドゥートの墓には、地下12mほどのと

ころに埋葬室がある。実は、これが発掘以来、手つかずの状態にあり、今回の修復のために調査することになった箇所である。

この埋葬室には古王国の伝統ののっとり丁寧な描かれた、大変に美しい壁画が残されている。初めて見た時には、その美しさに驚いた。四千年前の絵が、当時の色合いをそのまま残しながら目の前にあったのである。絵の内容は、葬祭のための供物であり、脚を縛られた牛、鳥、パン、ビール、蜂蜜などが描写されている。

しかし、よく見てみると、すでに多くの壁のプラスターが落ちているばかりではなく、今まさに落ちようとしていることがわかって、大きなショックを受けることにもなった。このように美しい壁画が崩壊の危機に瀕しているのである。

そこで、今年の調査では、すでに落ちてしまっている壁画の断片のうち、大きなものを集めて、さらに壊れてしまわないように救出することにした。この作業には、本学の米田先生と院生・学生諸君の力をおかりすることになった。

実際の作業は、朝7時半にホテルを出て、8時すぎから午後1時までである。今回の調査は、ちょうどラマダーン（断食月）にかかってしまい、労働時間が通常より1時間短くなっている。したがって、一日に5時間弱しか仕事ができなかった。

それでも、埋葬室で数時間も作業していると息が苦しくなってくる。なにしろ、この埋葬室は5m×9mほどの広さしかなく、また、地下深くに、腰をかかめて入ることができる小さな入り口があるのみで、何人もの人間が活動すると空気が足りなくなってくるのである。

このような環境のもとでも、関西大学の考古学者の手際の良さは抜群で、次々と手早く地図をつくり、壁画の断片や、床に散らばるミイラの包帯を回収整理し、壁画の正確な写真を取ってゆく様子は、超人的ともいえるものであった。

さらに、このようなバイタリティーに溢れる活動は、日没後も続く。これよりハン・ハリ（有名な土産物屋街）に突撃を敢行する、という指揮官の号令一下、考古学徒たちは、観光客を手ぐすね引いて待っている土産物屋に突入し、多大の戦果を得て、帰還したことは言うまでもない。